日本農業新聞　2012年(平成24年)5月15日(火曜日)

農で子どもの心 癒やそう

神奈川・JAセレサ川崎

神奈川県のJAセレサ川崎は、不登校や引きこもりの子ども、若者に農や食を通じて元気を取り戻してもらおうと、県や川崎市内の特定非営利活動法人（NPO法人）と組んで支援事業に取り組んでいる。収穫の喜びや農産物のおいしさを体で知ることで、変わり始める子どもが少なくないという。開始から3年目。居場所を見失った子どもたちの心をほぐす農業の力に期待がかかる。（片岡優佳）

ラッカセイの収穫を初めて体験する子どもたち（2011年9月、神奈川県川崎市で＝JAセレサ川崎提供）

県、NPOと支援事業

不登校生ら意欲の芽

県は2010年、JAと地域で活動するボランティアやNPO法人、大学などとの連携を支援し、さまざまな課題を解決するために連携促進モデル事業に着手。不登校の子どもたちが元気を取り戻すきっかけをつくろうと、JAセレサ川崎とNPO法人「フリースペースたまりば」（川崎市高津区）の仲立ちをした。

県環境農政局農政部農政課の田中敏子副課長は「JAは農業のプロ。しかし、都市化する中でそのノウハウが埋もれてしまうのはもったいない。JAの力を生かしたかった」と力を込める。

回を重ね手応え

同年7月、JAは用意した市内の畑でジャガイモを収穫、自分たちで調理、試食する体験を提供。子どもたちは土の感触を確かめながら、ジャガイモ50キロを収穫し、ポテトチップスやポテトサラダにして、新鮮な芋の味を堪能した。

JAの大型農産物直売所セレサモスは、米や地場産野菜を提供。保護者らも参加してバーベキューを楽しみ、農業を学んだ。

これまで芋やラッカセイの収穫、こんにゃく作りを体験。子どもたちはラッカセイが地中に実をつけることや、芋から作るこんにゃくに驚いた。2年間で3回行い、参加者は延べ約100人に上る。

JA都市農業振興課の畑功課長は、「小学生から大学生までが喜んでくれる姿を見て、やって良かったと実感した。回を重ねるごとに子どもたちは積極的になっている」という。

地域と共に

たまりばは、農や食への取り組みに教育的な効果があるとして、6年前から施設内の菜園で子どもたちに野菜を栽培させ、昼食も自ら調理させてきた。

驚きと発見奏功

JAとの連携で、生産者が管理した土のふかふかとした感触や農産物の質など、プロの技術力の高さに驚いたという。周囲となじめずトラブルを起こしがちだった子どもが、見違えるほど生き生きと作業をするようになり、スタッフは子どもたちの変化に目を見張る。たまりばのスタッフ、佐藤有樹さんは「自分の居場所を見つけられない子どもたちにも、畑には居場所と役割があった。農業の計り知れない力を見た気がしている」と期待を寄せる。（随時掲載）